細野要齋著『尾張名家誌』訳注稿

尾張名家誌研究会（〔主編〕大島絵莉香・鬼頭孝佳、〔訳注〕水野雅之・張名揚・近藤めぐみ・石丸羽菜・服部寛風）

はじめに

本稿は、『尾張名家誌』の訳注稿である。著者の細野要齋（名は忠陳、号が要齋）の「尾張名家誌凡例」によると、該書は尾張の名家を儒林・兵法・循吏・書画・天文・暦算・医術・忠孝・貞烈・隠逸・畸人・雑技・沙門の分類にて編纂、さらに儒林の百五十名のうち、六十名を採摘したものであるという。また掲載された人物には、尾張で出生した者・尾張で死去した者・生前に尾張で禄を得た者が含まれているとされる。

該書は明治二十四（一八九一）年、『日本教育史資料』にすでに翻刻はあるが、六十名全てを網羅したものではなく、安政四年（一八五七）刊本に見られる空格（一字分の空白。敬意を表す語の直前に附される。）も排除されている。ほか、人物事典等に該書が取り入れられたことについては枚挙に暇がないが、詳細な訳注は未だ存在しない。本稿では七名分の訳注を掲載し、次号以降も継続する予定である。なお、訳注の対象となる儒学者の順は、必ずしも『尾張名家誌』に従うものではない。

【凡例】

底本は愛知県西尾市岩瀬文庫蔵、細野要齋著『尾張名家誌』初編、二巻二冊　安政四(一八七五)年刊本を用いた。

本文についての凡例は以下である。

・本文の句読点は、原典に従う。
・字体は可能な限り原典に従う。
・割注は〔　〕で示した。
・割注には句読点がないため、文意に則して附した。
・本文に一字ほどの空格のあった箇所は、□で表す。
・訓点の不鮮明な箇所は国立国会図書館本を用いて補ったが、注記しない場合がある。
・訓点の合字は開いた。(メ→シテ　等)

書き下し文についての凡例は以下である。

・原則として古文仮名遣いとする。
・訓点の合字は開いて書き下した。
・本文にない句読点を加える場合があるが、注記しない。
・ルビは現代仮名遣いとする。
・割注は〔　〕で示した。
・本文中の空格は、表記せずに書き下した。

語注についての凡例は以下である。

・見出しの番号の順序は、書き下し文の順序に従う。
・見出しは本文と表記を同じくするが、訓点は省く。

また書き下し文・語注・通釈に関わらず、人名・字・号の字体は本文に従う。

なお、原本の複写と閲覧にご協力くださった西尾市岩瀬文庫に御礼申し上げます。

一、堀杏菴

『尾張名家誌』「堀杏庵」の伝は、『先哲叢談』初篇と、いくらか記述が重複する。『先哲叢談』初篇には、すでに詳らかな訳注(原念斎(はらねんさい)著　源了圓(みなもとのりょうえん)・前田勉(まえだつとむ)訳注『先哲叢談』平凡社　一九九四年)が存在するため、今回注を附す際に、参照とした場合には末尾に[先]と記した。また、『先哲叢談』の本

文は全て名古屋大学附属図書館蔵、特殊形態資料（請求番号１２１．２／Ｈ、文化三（一八一六）年刊本を参照とした。

なお、堀杏菴の伝は比較的長いため、前半と後半に分割した。

【本文前半】

堀正意字敬夫號杏菴又杏隠。通稱與十郎。祖定澄。〔任伊豆守〕近江野洲郡野村城主也。永禄乙丑戦死于北白川之役。父徳印　幼為僧。後学醫有名于時。杏菴生七歳。従父入京。十歳習句讀於南禪寺。後師事藤原惺窩。〔名粛〕博學篤行。與林羅山〔名忠〕松永尺五〔名遐年〕那波活所〔名方〕有四天王之稱。為人遜順寡言。衆皆指為長者。

【書き下し文】

堀〔１〕正意、字は敬夫。杏菴、又、杏隠と号す。通称は与十郎。祖、定澄〔２〕〔伊豆守に任ぜらる。〕は、近江野洲郡野村の城主〔３〕なり。永禄乙丑〔４〕北白川の役〔５〕に戦死す。父・徳印〔６〕、幼にして僧と為る。後に医を学び時に名有り。杏菴、生れて七歳。父に従ひて京に入る。十歳、句読を南禪寺〔７〕に習ひ後に藤原惺窩〔名は粛。〕〔８〕に師事す。博学篤行なり。林羅山〔名は忠。〕・松永尺五〔名は遐年。〕・那波活所〔名は方。〕と四天皇の称〔９〕有り。人と為り遜順にして寡言。衆、皆指して長者と為す。

【語注】

〔１〕堀―堀家は菅原姓であるという。家系図である『士林泝洄』巻第百一「壬之部一」の冒頭によると、堀氏は菅原道真の子・堀通定より始まり、その子・貞真から近江の地に居着いた。以下、『士林泝洄』の内容を、編者が書き下したものを記す。「家譜に曰はく、菅原の丞相公、伊勢の守と為りし時、赤堀貞国の女（むすめ）、丞相に奉仕す。其の後、丞相、移りて近江守と為り、一子を生みて菅丸と曰ふ。延喜元年、丞相、左遷の時、菅丸は僅かに二歳。潜みて野洲郡延命寺に寓し、元服して通貞と名づけ、堀氏と為る。其の子・貞真、江州野村に生まれ、始めて菅神祠を建つ。其の後八代の孫、弥三郎秀形（通称　弥三郎、名が秀形）、佐々木秀義に属す。治承四年庚子、頼朝義兵を起こす。佐々木父子、之に従ひ、秀形、武功を以て旗を掌（つかさど）る。豆州に於ひて山

木判官を撃ちつ。秀義、其の功を賞めて「秀」の字を与へ、且つ蛇目の紋を用ふるを免す。代々、旗家と為る。)(（　）内は、執筆者の補注。蓬左文庫本『士林泝洄』。一二五巻本、また稿本一〇三巻本(欠あり)にて確認。稿本には一部、訓点が確認できた。また同内容は、名古屋市教育委員会編『士林泝洄』(四)(『名古屋叢書』続編　第二十巻所収)　名古屋市教育委員会　一九七八年十一月　二一〇頁でも確認可能。なお、蓬文庫本『名古屋叢書』続編で、「旦」(あしたに)と翻刻されていた箇所は、蓬左文庫本の一二五巻本・稿本一〇三巻本「且」(かつ)の記述によって書き下した。

堀杏菴の伝に注として附した『士林泝洄』は、以下、同じく百一巻を引用した。)

〔2〕定澄―もとは堀貞澄といったが、永正八年(一五一一)、若年より仕えた佐々木定頼に軍功を認められ、定頼より一字を賜り定澄と称するようになった。同じく『士林泝洄』巻第百一「壬之部一」に、以下のようにある。

「若年より定頼に仕へ、近習と為る。…定頼、貞澄の戦功を賞めて、感状及び「定」の字を賜ふ。是れより定澄と称す。」

〔3〕近江野洲郡野村の城主―現在の滋賀県近江八幡市、または野洲市に当たるか。永生十六年(一五一九)に、定澄が年老いた父・貞成の領地を継いで近江野洲郡野村の城主となったという記述が、同じく『士林泝洄』にある。「十六年卯、父・貞成、老衰して旗頭を辞して致仕す。同五月廿四日、家領を継ぎて野村城主と為る。」

〔4〕永禄乙丑―永禄八年(一五六五)。この年、室町将軍・足利義輝が永禄の変にて、三好三人衆と松永秀久に殺害された。

〔5〕北白川の役―詳細不明。北白川は、京都の地名を指すか。室町将軍・足利義輝が永禄の変で殺された時期は、当時の日記である『言継卿記』によると五月である。定澄が戦死したのはこの際であるという可能性を疑ったが、一方で定澄の死の時期について、『士林泝洄』には以下のように十一月とあり、一致しない。「十一月廿四日、白川に於ひて貞則、高名有り。義賢、感状を賜はる。且つ書を定澄に賜り以て之を賞美す。八年丑冬、義賢、又、城州に軍し、対陣して日を累ぬ。古来、江

州の国俗十一月廿四日を以て大師講と為し、家々、粥を煮て相ひ共給す。故に士卒、戦を倦む者、二十三日密かに其の里に帰す者多し。敵軍、其の虚に乗ず。二十四日昧爽、疾く之を撃ち、江軍大ひに潰して走ぐ。定澄、従兵を指揮して之を防ぐ。敵軍、火を放つ。時に于ひて烈風火熾、連営焼き亡ぶ。定澄、苦戦し遂に之に死す。享年九十。」

語注〔1〕同様、蓬文庫本『名古屋叢書』続編で、「旦」（あしたに）と翻刻されていた箇所は、蓬左文庫本の一二五巻本・稿本一〇三巻本「且」（かつ）の記述によって書き下した。

〔6〕徳印―堀杏菴の父。はじめは僧であったが、中年になって還俗し、野村を去って安土八幡に寓居した。天正十九年に上洛して医学を曲直瀬道三（名は他に正盛。字は一渓、号は雖知苦齋。当時の名医。）に学んだ。医学を修得し、当時名があったという。『士林泝洄』に、以下のようにある。「始め僧と為り、野村城下成就山延命寺に往登す。中年にして還俗し、野村を去りて安土八幡に寓居す。天正十九年卯、入洛し、且つ雖知苦院一渓道三に従ひ、医業を伝へ、其の術を以て名有り。」

〔7〕南禅寺―京都府左京区にある禅寺。臨済宗南禅寺派の大本山。学問の中心地であった。

〔8〕藤原惺窩―（永禄四・一五六一―元和五・一六一九年）。藤原冷泉家の出身。儒学者。僧となり、朱子学、陽明学を学んだ。弟子に林羅山・那波活所・松永尺五・堀杏庵ら。

杏菴が藤原惺窩に入門したのは慶長十一（一六〇六）年、二十二歳のこと。（『堀頤貞先生年譜稿本』東京大学使用編纂所蔵）〔先〕

〔9〕四天王之称―原念斎『先哲叢談』、茅原虚斎『茅窓漫録』、那波魯堂『学問源流』に類似の記述あり。〔先〕

原念斎『先哲叢談』巻二の六葉表、茅原虚斎『茅窓漫録』上巻「朱子学四書来由并二先生像」の十五葉表、那波活所『学問源流』六葉裏に同様の内容が確認できる。しかしながら『学問源流』には「羅山．堀正意．鎌田德菴．活所ノ徒アリ．世人是ヲ四天王ト云．」（句読点、原文ママ）とあり、『先哲叢談』・『茅窓漫録』・『尾張名家誌』の松永尺五が、ここでは菅玄同と入れ替わって

いることがわかる。『学問源流』の鎌田徳菴と『茅窓漫録』の菅玄同は、同一人物であり、氏が蒲田、または鎌田。名は玄同。号は徳菴、得菴である。

『茅窓漫録』・『学問源流』ともに、岩瀬文庫蔵本を参照にした。

【現代語訳】

堀正意、字は敬夫。杏菴、また杏隠と号した。通称は与十郎。祖父の堀定澄〔伊豆守に任ぜられた。〕は近江野洲郡野村の城主であった。定澄は永禄乙丑(八年、一五六五年)北白川の役で戦死した。堀杏菴の父・徳印は、幼いころに僧となった。後に医術を学び、当時名声があった。杏菴は生まれて七年たったころ、父につれ従って京に入った。杏菴が十歳のころ、文章の読み方を南禅寺で習い、その後　藤原惺窩に師事した。杏菴は広く学び、真面目な人であった。彼は林羅山・松永尺五・那波活所の三人と併せて、四天皇の呼称があった。彼の性質は、人によくしたがって言葉が少ないものであった。みなは彼を指して、行いに徳のある人とした。

【本文後半】

慶長丁未安藝侯〔名幸長。淺野氏。任二紀伊守一〕聘召賜二秩禄一。侯卒仕二嗣君一。〔名長晟。任二但馬守一〕甲寅冬従二大阪之役一。□敬公聞二其名一。請二於安藝侯一而辟レ之。元和壬戌始仕二本府一。爾後従□レ駕西東者數回。寵最渥。□公抵二江戸一及發二江戸一之日。杏菴必與二長臣一謁二□幕府一。有二衣服之賜一。寛永丙子朝鮮使來聘。杏菴承□レ命筆語。使人見二其文一大嘆賞。目以二文苑老将一。壬午春奉二幕府命一。入二弘文院一與二諸家系圖傳編纂之事一。又別撰二武家系圖若干巻一。此歳十一月二十日病二没于江戸一。享年五十八。葬二于芝金地院一。所レ著有二甲申闘記。朝鮮征伐記。東行日録。歸尾紀行。中山日録等一。行二于世一。〔杏菴娶二茅原田氏一生二一子一。伯正英號二立菴、又黙桃軒一。通稱七大夫。仕二安藝侯一。季貞高、號二忘齋一。通稱勘兵衛。為二杏菴嗣一仕二本府一。子孫世レ禄。立菴有二二子一曰玄達、曰正朴。玄達生二景山一。名正超、字君燕。正朴娶二木下順菴女一生二南湖一。名正順。字身之。又號二習齋一。皆有二文名一。〕

【書き下し文】

慶長丁未〔１０〕、安芸侯〔名は幸長。浅野氏なり。紀伊守に

任ぜらる。〔１１〕、聘召〔１２〕し秩禄を賜ふ。侯、卒す〔１３〕。嗣君〔名は長晟。但馬守に任ぜらる。〕〔１４〕に仕ふ。甲寅冬〔１５〕、大阪の役に従ふ。敬公〔１６〕、其の名を聞き、安芸侯に請ひて之を辟す。元和壬戌〔１７〕、始めて本府〔１８〕に仕ふ。爾後　駕に従ひて西東すること数回、寵、最も渥し。公、江戸に抵る、及び江戸を発するの日、杏菴、必ず長臣と幕府に謁す。衣服の賜有り。寛永丙子〔１９〕、朝鮮使、来聘す。杏菴、命を承けて筆語す〔２０〕。使人、其の文を見て大ひに嘆賞し、目するに文苑の老将〔２１〕を以てす。壬午春〔２２〕、幕府の命を奉じて、弘文院〔２３〕に入り、『諸家系図伝』〔２４〕編纂の事に与る。又、別に武家系図若干巻〔２５〕を撰す。此の歳十一月二十日江戸に病没す。享年五十八。芝金地院〔２６〕に葬らる。著す所に『甲申闘記』・『朝鮮征伐記』・『東行日録』・『帰尾紀行』・『中山日録』等有り。世に行はる。〔杏菴　茅原田氏を娶り、二子を生む。伯は正英、立菴、又、黙桃軒と号す。通称、七大夫。安芸侯に仕ふ。季は貞高、忘齋と号す。通称、勘兵衛。杏菴の嗣と為り、本府に仕ふ。子孫禄を世よにす。立菴、二子有り。曰はく玄達、曰はく正朴。玄達、景山を生む。名は正超、字は君燕。正朴、木下順菴の女を娶りて南湖を生む。名は正順、字は身之。又、習齋と号す。皆、文名有り。〕

【語注】

〔１０〕慶長丁未―慶長十二（一六〇七）年。

〔１１〕安芸侯―慶長十六（一六一一）年。堀杏菴が二十七歳のとき、浅野幸長（天正四（一五七六）年～慶長一八（一六一三）年）に仕えた。（『堀頤貞先生年譜稿本』東京大学使用編纂所蔵）。浅野家はこの後、元和五（一六一九）年に安芸国広島に移封。〔先〕

〔１２〕聘召―君主が礼儀を尽くして人を招くこと。

〔１３〕公卒―慶長十八（一六一三）年のこと。この時、杏菴二十九歳。

〔１４〕嗣君―浅野長晟（天正十四（一五八六）年～寛永九（一六三二）年）。浅野幸長の弟。

〔１５〕甲寅冬従大阪之役―慶長十九（一六一五）年。大阪冬の陣。

〔１６〕敬公―徳川義直（慶長五（一六〇〇）年～慶安三（一六五〇）年）。尾張徳川の祖。徳川家康の九男。

〔１７〕元和壬戌―元和八（一六二二）年。
〔１８〕本府―尾張藩。
〔１９〕寛永丙子―寛永十三（一六三六）年。
〔２０〕承命筆語―『士林泝洄』に「十三年子、朝鮮人来朝す。江戸に於いて即ち儒官　菊軒及び医官等と筆談す。」とある。
〔２１〕文苑老将―朝鮮通信使の詩学教授である権仗（号は菊軒）の評に同様の表現がある。『新編覆醤続集』巻十六、「與朝鮮國學士菊軒筆語」（朝鮮国の学士菊軒と筆語す）に、権仗と石川丈山との筆談のやりとりが記されている。権仗のその筆談に、「以正意爲文苑之老將」（正意（杏菴）を以て文苑の老将と為す）とある。〔先〕
〔２２〕壬午春―寛永十九（一六四二）年。この年、杏菴五十八歳。
〔２３〕弘文院―当時、林家の私塾。〔先〕
〔２４〕諸家系図傳―『寛永諸家系図伝』。杏菴は諸氏の部の編纂を任命された。『林羅山文集』巻四十八、「寛永諸家系図伝序」に出る。〔先〕
『林羅山文集』巻第四十八「序上」、「寛永諸家系圖傳序」に「使正意撰諸氏部」（正意をして諸氏の部を撰じせしむ）とあり。
〔２９〕武家系図若干巻―『新定武家系圖傳纂』三十巻等がある。〔先〕
〔３０〕芝金地院―臨済宗南禅寺派。江戸城南に位置する。黒衣の宰相と言われた金地院崇伝が江戸城北の丸の内に創建し、その後、寛永十六（一六三九）年に、現在の東京都港区芝公園内に移転。

【現代語訳】

慶長丁未（十二年、一六〇七年）安芸侯の浅野幸長〔名は幸長。浅野氏である。紀伊守に任ぜられた。〕が杏菴を礼儀を尽くして招き、秩禄を賜わった。安芸侯の幸長が卒すると、後継ぎの長晟〔名は長晟。但馬守に任ぜられた。〕に仕えた。甲寅冬（慶長十九年、西暦一六一五年）に大阪冬の陣につき従った。尾張の義直公が杏菴の名声を聞いて安芸侯に頼みこみ、杏菴を招いた。元和壬戌（八年、一六二二年）、杏菴は新たに尾張藩に仕えた。その後、義直公の外出につき従って西や東に行くこと数回、杏菴に対する寵愛は最も厚いものであった。義

直公が江戸に到着、及び江戸を出発する日には、杏菴は必ず長臣と幕府で謁見した。衣服の下賜が有った。寛永丙子に朝鮮使がやってきた。杏菴は命令を承けて彼らと筆談した。朝鮮からの使者は、杏菴の文を見て大いに驚き褒め称え、杏菴に見える様子は、彼を文壇の老将としているようであった。

壬午春　幕府の命を奉じて弘文院に入り、『諸家系図伝』編纂の事業にあたった。また別に武家系図若干巻を撰じた。此の歳十一月二十日江戸に病没した。享年五十八。芝金地院に葬られた。著したものに『甲申闘記』・『朝鮮征伐記』・『東行日録』・『帰尾紀行』・『中山日録』等が有る。それらは世間に通行した。〔杏菴は茅原田氏の娘を娶り、二人の男子を生んだ。長男は正英といい、立菴、また黙桃軒と号した。通称は七大夫。(杏菴の仕えていた)安芸侯に仕えた。次男は貞高という。忘齋と号した。通称は勘兵衛。杏菴の後継となり、尾張藩に仕えた。その子孫は俸禄を世襲した。立菴には二人の男子がいた。一人を玄達といい、もう一人を正朴といった。玄達は景山を生んだ。名は正超、字は君燕である。正朴は木下順菴の娘を娶って南湖を生んだ。名は正順、字は身之。また習齋と号した。右記の人物は皆、文学の名声があった。〕

（大島絵莉香　記）

五、深田明峯

【本文】

深田正清字晉甫號明峯。通稱宗信〔後改正室〕。圓空子。幼承家學。又善天學。寛文乙巳七月獻所著璿璣玉衡圖於□瑞龍公。□公又獻之□幕府。加賜俸米以賞其善繼家學。寶永丁亥特賜采邑。此歳十月二十四日歿于京。享年六十九。葬于浄福寺中寶林院。

【書き下し文】

深田正清字は晋甫、明峯と号す。通称は宗信〔後、正室と改む。〕。円空〔1〕の子。幼にして家学を承け、又、天学〔2〕を善くす。寛文乙巳〔3〕七月著す所の『璿璣玉衡の図』〔4〕を瑞龍公〔5〕に献ず。公、又、之を幕府に献ず。俸米を加賜して以て其の善く家学を継ぐを賞す。宝永丁亥〔6〕、特に采邑〔7〕を賜ふ。此の歳十月二十四日、京に歿す。享年六十九。浄福寺中宝林院〔8〕に葬らる。

【語注】

〔1〕圓空―深田圓空。（？～寛文三（一六六三）年）。江戸時代前期の学者。深田明峯の父。深田家は関ヶ原の合戦で西軍についたため、家は一度没落したが、圓空以後、藩儒の職を務めた。詳細は次稿に期す。

〔2〕天学―天文学。

〔3〕寛文乙巳―寛文五（一六六五）年。

〔4〕璿璣玉衡圖―『近世漢学者著述目録大成』に書名は確認できるが、未詳。なお、璿璣玉衡は、美しい珠で飾った天文測量機。渾天儀状のもの。

〔5〕瑞龍公―徳川光友（寛永二（一六二五）年～元禄十三（一七〇〇）年）。江戸前期の大名。尾張名古屋藩徳川家二代当主。家康の孫、義直の長男。初名は光義、字は子龍。従二位権大納言に至る。武技・書画・管弦・茶道に通じた。

〔6〕宝永丁亥―宝永四（一七〇七）年。

〔7〕采邑―領地。

〔8〕浄福寺中宝林院―京都市上京区浄福寺通一条上ル笹屋町二丁目に

〔9〕ある寺。浄土宗。山号は恵照山。中宝林院については不明。

【現代語訳】

深田正清、字は晋甫、明峯と号した。通称は宗信。〔後に正室と改めた。〕円空の子。幼くして家伝の学業を受け継ぎ、また天文学に長けていた。寛文五年七月著した天文測量機の図を瑞龍公に献上した。瑞龍公はさらにこれを幕府に献上した。俸禄米を加増して、立派に家伝の学業を受け継いだことを誉めたたえた。宝永四年、特別に領地を賜った。この年の十月二十四日、京で没した。享年六十九。浄福寺中宝林院に葬られた。

（水野雅之　記）

六、深田慎齋

【本文】

近江人。永原佐平次子。受二學于明峯一。明峯愛二其淑質一養為レ嗣。寶永丁亥冬襲レ禄為二儒官一。享保辛亥加二賜采地一。元文丁己十

月十二日歿。享年五十五葬二于城南性高院一。

【書き下し文】

深田正倫〔1〕、字は彝卿。慎齋と号す。通称は清藏〔後に宗信と改め、又正室と改む。〕。近江の人。永原佐平〔2〕の次子。学を明峯〔3〕に受く。明峯、其の淑質〔4〕を愛し、養ひて嗣と為す。宝永丁亥〔5〕冬、禄を襲ひて儒官と為る〔6〕。享保辛亥〔7〕、采地〔8〕を加賜す〔9〕。元文丁己〔10〕十月十二日、歿す。享年五十五。城南性高院〔11〕に葬むる。

【語注】

〔1〕深田正倫―（天和三（一六八三）年～元文二（一七三七）年）。旧尾張藩士阿部直輔の『尾藩世記』によれば、彼は嘗て徳川宗春の『温知政要』の添削を行ったという。『尾藩世記』七「享保十六年」には「是年、温知政要といへる書を著し、近侍等ニ賜ふ。諸人、大ニ感佩す」とあり、次に「此書、公専ら自意を述られし書にして、文章ニ至りてハ、儒臣深田宗信、添削を加ふといふ。宗信ハ始正倫といふ。深田円空の孫、宗信（マヽ）の養子なり。（後略）」と記されている。（『尾藩世記』（上）『名古屋叢書』三編第二巻所収。名古屋市教育委員会一九八七年）

〔2〕永原佐平―未詳。『士林泝洄』巻百所収、「正倫」の条には「実、江州野洲郡永原邑住士永原左平男」とある。（『士林泝洄』（四）『名古屋叢書』続編第二十巻所収。名古屋市教育委員会　一九六八年）

〔3〕明峯―深田明峯。（寛文十六（一六三九）年～宝永四（一七〇七年）。前稿参照。

〔4〕淑質―善美な天性。趙岐「孟子題辞」、「孟子生有淑質。」

〔5〕寶永丁亥―宝永四（一七〇七）年。

〔6〕襲禄為儒官―『士林泝洄』には「宝永四年亥十二月十四日、父家領内賜二百五十石一」と記されている。

〔7〕享保辛亥―享保十六（一七三一）年。

〔8〕采地―臣下の地行所。領地。采邑。

〔9〕加賜采地―『士林泝洄』には「享保十六年亥十二月二十八日、加二倍食邑百五十石一」と記されている。

〔10〕元文丁己―元文二（一七三七）年。

〔11〕性高院―松平尾張守忠吉菩提寺・浄土宗大雄山性高院。現住所は名古屋市千種区幸川町三―六。『名古屋市史』「社寺編」には「性高院は大雄山と號す、中區門前町一丁目の東側に在り、境内は千百七十三坪九合四勺〔徳川時代に五千九百六十六坪あり、除地なりき〕有り、准別格〔徳川時代は上人地〕十七等にして、京都知恩院の末寺なり、もと武藏埼玉郡忍庄持田村に在りて、攝受院正覺寺と號する古跡なりき、天正十七年、松平忠吉、〔性高院殿憲瑩玄白と號す、〕その母寶臺院〔天正十七年五月十九日逝、松譽貞樹と號す、駿河寶臺院に葬る〕の為に再興し、滿譽玄道〔圓蓮社凝信と號す、寛永三年十月二十九日示寂す、墓あり〕を以て開山となす。慶長八年、清須外町に移り、十三年二月十日、制札を給はり、十五年、今の地に移る、後院號を性高院と改む」とある。(『名古屋市史』　名古屋市役所、一九一五年)

【現代語訳】

深田正倫、字は彝卿。慎齋と号した。通称は清藏である。〔後に宗信に改め、また正室に改めた。〕。近江の人であり、永原左平の次男である。学問は明峯に教わった。明峯は彼の善美な天性を愛し、教え育てて後継ぎにした。宝永四年の冬、(明峯の)禄を継いで儒官となった。享保一六年、(彼に)さらに知行地を賜った。元文二年十月十二日に亡くなった。享年五十五歳。名古屋城の南の性高院に葬られた。

(張名揚　記)

七、深田厚齋

【本文】

深田正純字美之號厚齋。通稱佐市。慎齋長子。受業于松岡恕菴〔名成章〕。為人謹厚安詳。燕居嚴正。行止有常。飲酒克温。元文己未襲禄為儒官。擢近侍兼伴讀。數得賞賜。天明癸卯年七十□公及□世子賜之和歌。世以為榮。甲辰四月晦日歿。享年七十一葬于先塋側。

【書き下し文】

深田正純〔1〕字は美之、厚齋と号す。通称は佐市。慎齋〔2〕

の長子なり。業を松岡恕菴〔名は成章〕〔3〕に受く。人と為り謹厚にして安詳なり。燕居〔4〕して厳正なり。行止〔5〕常有り。酒を飲み克く温たり。元文己未〔6〕、禄を襲ねて儒官と為る。近侍〔7〕に擢せられ伴読〔8〕を兼ぬ。数しば賞賜を得。天明癸卯〔9〕、年七十にして　公〔10〕及び世子〔11〕之に和歌を賜ふ。世、以て栄と為す。甲辰〔12〕四月晦日、歿す。享年七十一、先塋の側に葬らる〔13〕。

【語注】

〔1〕深田正純―正徳四（一七一四）年～天明四（一七八四）年。宝暦六（一七五六）年に藩主徳川宗勝の侍臣となり、次いで世子治休に仕え伴読を兼ねたが、治休の死後は儒臣に復して世子治興・治行の講読に従った。著作に『厚齋遺稿』『厚齋随筆』『遂性篇』がある。

〔2〕慎齋―「深田慎齋」を参照。

〔3〕松岡恕菴―寛文八（一六六八）年―延享三（一七六四）年。本草家。京都に生まれ、山崎闇齋と伊藤仁齋について儒学を修める。稲生若水に本草学を学び、医学も修めた。町医を業とする傍ら儒学を講じ、百名を超す聴講者が集まった。門下に小野蘭山、浅井図南など。

〔4〕燕居―間暇無事で休息するとき。

〔5〕行止―みもち。振る舞い。品行。徳行。

〔6〕元文己未―元文四（一七三九）年。なお、本書前項では父親である深田慎齋の逝去は元文二年とされており、厚齋が後を継ぐまで二年間の空白が存在することになる。『士林泝洄』においてもこの慎齋の逝去・厚齋の継行の二つの年号の記述は同様となっている。（『名古屋叢書』続篇第二十巻所収『士林泝洄』（四）名古屋市教育委員会、一九六八年）

〔7〕近侍―主君のそば近く仕える人。

〔8〕伴讀―子弟の学問上の相手をしていっしょに読書する人。

〔9〕天明癸卯―天明三（一七八三）年。この年、藩主徳川宗睦によって、尾張明倫堂が藩校として再興される。

〔10〕公―時の藩主、徳川宗睦。

〔11〕世子―宗睦には実子の長男治休、次男治興がいたが、治休は安永二（一七七三）年、治興は安永五（一七七六）年に病で早世している。美濃高須藩から松平義柄

をが養嗣子に迎られ、徳川治行と改名するが、彼もまた寛政五（一七九三）年に若くして亡くなる。その後一橋家から迎えられた齋朝が、宗睦を継いで尾張藩主となる。年時からするに、ここでの「世子」は徳川治行を指すか。

〔12〕甲辰―天明三（一七八四）年。

〔13〕先塋―祖先の墓。「深田慎齋」の注〔11〕「性高院」の項目を参照。

【現代語訳】

深田正純、字は美之、厚斎と号した。通称は佐市という。慎斎の長子であった。業を松岡恕菴（名は成章）から受けた。性格は謹み深く手厚く、しとやかであった。休息するときにも厳正であり、その徳のある振る舞いは一定であった。酒を飲んでも穏やかでい通した。元文四年、家禄を継いで儒官となった。近侍に抜擢され、伴読を兼任した。たびたび賞賜を得た。天明三年、七十歳のとき、公と世子が正純に和歌をくださった。世間はこれを誉れとした。天明四年、四月三十日に亡くなった。享年七十一歳、先祖の墓所の近くに葬られた。

（近藤めぐみ　記）

八、深田九皐

【本文】

深田正益字ハ子謙號ス二九皐ト一。通稱ハ彦九郎。慎齋ノ次子。厚齋無シレ子養テ二九皐ヲ一為レ嗣ト。幼ニシテ受ク二家學ヲ一既ニ襲レ禄ヲ歴二諸職ヲ一為二用人ト一。所レ任スル皆有リ二能名一。為レ人ト聰敏。寛洪有レ識。材足二専對ニ一。深ク了ス二世故ヲ一。不下以二得喪ヲ一欣戚上。渉リ二経史ニ一能ス二詩文和歌ヲ一。燕居ニハ則彈シ二琵琶ヲ一演ス二平曲ヲ一聴ク者忘レ倦ヲ。當時ノ士論以二九皐ヲ一為二弟一流ト一。享和壬戌七月十三日歿ス。享年六十七葬ル二于先塋ノ側ニ一。所レ著ス有二惺惺齋漫録。日抄。戯言等一。

【書き下し文】

深田正益、字は子謙、九皐〔1〕と号す。通称は彦九郎。慎斎の次子。厚斎子無し、九皐を養て嗣と為す。幼にして家学を受く、既に禄を襲ひて、諸職を歴、用人〔2〕と為る。任ずる所、皆能名〔3〕有り。人と為り、聰敏〔4〕、寛洪〔5〕、識〔6〕有り。材、専対〔7〕に足る。深く世故〔8〕を了す。得喪〔9〕を以て欣戚〔10〕せず。経史に渉り、詩文

和歌を能くす。燕居には則ち琵琶を弾じ、平曲〔11〕を演ず、聴く者は倦むを忘る。当時の士は論ずるに九皐を以て弟一流と為す。享和壬戌七月十三日歿す。享年六十七、先塋〔12〕の側に葬る。著す所、『惺惺齋漫録』、『日抄』、戯言等〔13〕有り。

【語注】

〔1〕九皐—幾重にも曲がって続く奥深い沢。深遠な所のたとえ。

〔2〕用人—江戸時代、大名・旗本・貴族などの家で、財用を預かり、内外の雑事を司ったもの。御用人。家臣の中で有能な者を任じ、新参者や家格の低い者から抜擢されることも少なくなかった。大名家にあっては、一般的に家老・番頭に次ぐ格式を有した。尾張藩の場合、朝廷や幕府に対する礼式・音信・贈答・供番を司るため、寛永十年（一六三三）に三名置いたのが始まりで、後に増員して五、六名となった。

〔3〕能名—有能であるという評判。

〔4〕聰敏—敏く賢い。頭が善い。

〔5〕寛洪—ゆったりとひろいこと。性質がおおらかなこと。

〔6〕有識—広く物事を知っていること。学問・見識のあること。官職典故に通じていること。

〔7〕専対—独断で自由に受け答えする。『論語』子路篇「子曰、誦詩三百、授之以政不達。使於四方、不能專對、雖多亦奚以爲。」

〔8〕世故—世間一切の事柄。世の俗事。世事。

〔9〕得喪—得ることと失うこと。成功と失敗。

〔10〕欣戚—喜びと悲しみ。「人間萬得喪、欣慼随所制」（胡長孺「題山外帰人詩」）

〔11〕平曲—『平家物語』を琵琶に合わせて語る音曲。後鳥羽天皇の頃、「盲人」生仏が始めたとされる。南北朝時代に明石検校、覚一が大成。応永～永享（一三九四～一四四一）頃に最も流行し、謡曲・浄瑠璃などに影響を与えた。

〔12〕先塋—祖先の墓。先祖代々の墓。正倫と同じく、名古屋性高院に埋葬。

〔13〕戯言—未詳。

【現代語訳】

深田正益、字は子謙、九皐と号した。通称は彦九郎と言い、慎齋の次子であったが、厚齋に子供がいなかったので、九皐を養子にし、嫡男とした。幼い頃から家の学問を授けられ、早くに家督を継いでからは、諸職を歴任して、用人となった。担当した仕事について、いずれもが有能だと噂した。性格は非常に賢く、ゆったりとしていて、広く学問や典故に精通していた。持ち前の才能は独力で使者として受け答えができるほどであった。深く世事も理解していた。成功や失敗で一喜一憂しなかった。経書や史書を渉猟し、詩文や和歌が得意だった。普段家でくつろいでいる時には、琵琶を弾き、平曲を演奏し、その音曲を聴いた者は疲れを忘れるほど演奏に聞き惚れた。当時の士は論じて九皐を弟一流とした。享和二年（一八〇二）七月一三日に亡くなった。享年六十七歳、先祖の墓所の傍らに葬られた。著作には『惺惺齋漫録』、『日抄』、『戯言』などがある。

（鬼頭孝佳　記）

九、小出永安

【本文】

小出立庭字不見號永安〔一作永菴〕。通稱内記〔居號新蕉軒〕。幼而顆悟。入京受業于熊谷活水〔名立節〕。學成召為儒官。後復遊京。又如江戸客于木下侯〔名利康任肥後守〕。貞享甲子十月二十七日歿于江戸。所著有論語序説抄。中庸和語抄。在尾張日。承□命撰城南霊岳院鐘銘。其嗣子建碑城南長榮寺。

【書き下し文】

小出立庭〔1〕、字は不見。永安〔一に永菴に作る。〕と号す。通称は内記〔居を新蕉軒〔2〕と号す。〕。幼にして穎悟〔3〕。京に入り業を熊谷活水〔名は立節。〕〔4〕に受く。学、成る。召されて〔5〕儒官と為る。後、復た京に遊ぶ。又、江戸に如き木下侯〔名は利康。肥後守に任ず。〕〔6〕に客たり。貞享甲子十月二十七日、江戸に歿す。著す所、『論語序説抄』、『中庸和語抄』有り。尾張に在る日、命を承けて城南の霊岳院の鐘の銘〔7〕を撰す。其の嗣子、碑を城南の長榮寺〔8〕に建つ。

【語注】

〔1〕小出立庭―小出家は越前藤原氏の家系にあり、元祖の新次郎重昌が星崎城主家相の小出氏の娘と婚姻関係を結んで、飯田から「小井出」に改めた。永安は重昌の孫にあたる。以上の小出家に関する記述は『張州雑志』巻五十八附録熱田所住地士の小出仁左衛門の項目による。同書には永安の伝記もあり、適宜参照した。また、永安は「新蕉軒」の名で俳人として活躍、母利司朗『俳諧史の曙』清文堂出版、二〇〇八・野田千平「初期熱田俳壇の蓮也・毎延・新蕉軒」(『金城学院大学論集・国文学編』(三五)、一九九三)などに詳しい。

〔2〕新蕉軒―本文には「新蕉軒」と送り仮名が付されているが、同書中の「…と號す」の用例にしたがって書き下した。

〔3〕穎悟―才智がすぐれて、賢明でさといこと。

〔4〕熊谷活水―熊谷立設(?〜明暦元(一六五五)年)の号。熊谷立設は京都の人。堀杏庵に師事、尾張藩儒となり、京都と尾張を往来していた。(西村天因『尾張敬公』名古屋開府三百年記念会、一九一〇)原資料、未詳。

〔5〕召為儒官―〔1〕既出『張州雑志』の「還二尾府一為二史官一」という記述により、通釈では「尾張藩に」と補った。

〔6〕木下侯―割注の「木下利康」という人物について、〔1〕既出の野田千平氏の論文では、『張州雑志』記載の「木下国定」と同定されている。木下国定は木下公定(承応二(一六五三)年〜享保十六(一七三一)年の別名で、第五代備中国足守藩主。延宝七(一六七九)年から享保十四(一七二九)年まで藩主・肥後守の任についている。

〔7〕霊岳院鐘銘―霊岳院は曹洞宗の寺院で、現在の桜天神社の社務のために創建された。寺内の時鐘には万治四(一六六一)年の小出永安による銘があった。銘文は『那古野府城志』・『正事記』に収録されている。霊岳院は明治初年に廃寺となるが、桜天神社は現存し、愛知県名古屋市中区錦にある。(『名古屋府城志』(名古屋市教育委員会編『名古屋叢書』第九巻、地理編(四)所収、名古屋市教育委員会、一九六三)・名古屋市役所

『名古屋市史』社寺編、名古屋市、一九一五）

〔8〕長榮寺―曹洞宗の寺院。中島郡萩園村の国分寺にはじまり、文禄年間（一五九二～一五九六）に清須に移設され、現在の寺名となる。慶長年間に南寺町矢場町に、天和二（一六八二）年に現在地の名古屋市中区橘に移転した。（名古屋市役所『名古屋市史』社寺編、名古屋市、一九一五年）

【現代語訳】

小出立庭、字は不見。永安〔一つに永菴とする。〕と号した。通称は内記〔居宅を新蕉軒と号した。〕。幼い頃から聡明であった。京都に上り、学問を熊谷活水〔名前は立節。〕に受けた。学業が成就した。尾張藩に呼び寄せられて儒官となった。その後に再び京都に遊学した。それから江戸に赴き木下侯〔名前は利康、肥後守の任にあった。〕のお抱えになった。貞享元（一六八四）年十月二十七日に江戸で亡くなった。著書に『論語序説抄』・『中庸和語抄』がある。尾張に在住していたとき、命令を受けて名古屋城南の霊岳院にある釣り鐘の銘文を撰述した。永安の跡取り息子は碑を名古屋城南の長榮寺に建てた。

（石丸羽菜　記）

十、小出蓬山

【本文】

小出忠字道恕。號蓬山又賡翁。永安子〔或云永安姪。〕。資性特異。幼受家學。其業既成。名聲藉甚。梶井宮召為儒官。後辭而歸鄉以儒為業。門人甚多。元禄甲戌十二月十五日歿。葬于城南延廣寺。

【書き下し文】

小出忠、字は道恕。蓬山、又、賡翁と号す。永安〔1〕の子〔或いは永安の姪〔2〕と云ふ。〕。資性、特異。幼にして家学を受く。其の業既に成る。名声、藉甚なり〔3〕。梶井の宮〔4〕、召して儒官と為す。後、辞して郷に帰り儒を以て業と為す。門人、甚だ多し。元禄甲戌〔5〕十二月十五日歿す。城南の延広寺〔6〕に葬らる。

【語注】

〔1〕永安―前項「小出永安」参照。

〔2〕姪―甥のこと。

〔3〕藉甚―評判が高い。『史記』酈生陸賈列伝「陸生以此游漢廷公卿間、名聲藉甚。」

〔4〕梶井の宮―梶井（現在の京都大原三千院）の住持の職にあった法親王に対する呼称。小出蓬山を呼び寄せられた「梶井の宮」は、入道慈胤法親王か入道盛胤法親王のことかと推測されるが、未詳。『三千院談議集』（水谷教章著、あそか出版社、一九六四年初版、一九七〇年第六版合巻本）を参照。

〔5〕元禄甲戌―元禄七（一六九五）年。

〔6〕延広寺―浄土真宗本願寺派。山号は無量山。文化十（一八一三）年製作の「名古屋御城下絵図」では、名古屋城の南に存在が確認できる。尚、延広寺は現在名古屋市中区松原にある。「名古屋御城下絵図」は愛知県図書館ホームページ内「愛知県図書館所蔵　絵図の世界」に公開されているものを参照した。

（URL:http://www.aichi-pref-library.jp/ezu/public/index.html

最終アクセス日：二〇一三年七月二十六日）

【現代語訳】

小出忠、字は道恕。蓬山、または賡翁と号した。永安の子〔もしくは永安の甥であるという。〕。持って生まれた性質は格別のものであった。幼い頃から家の学問の手ほどきを受けた。彼の学業が完成すると、よい評判は広く知られることとなった。梶井の宮は蓬山を呼びよせて儒官とした。後に辞任して帰郷し儒学を生業とした。門人は大変多かった。元禄七年十二月十五日に亡くなった。名古屋城の南の延広寺に葬られた。

（服部寛風　記）

おわりに

本稿は、尾張名家誌研究会にて発表・検討が行われた原稿を基にしている。同研究会は尾張地方の郷土資料を紹介することを目的に大島絵莉香と鬼頭孝佳が発足、名古屋大学中国哲学研究室の大学院生を中心に構成されている。以下、参加者名及びその所属を記す。

田中千寿　（名古屋大学非常勤講師）
小﨑智則　（愛知教育大学非常勤講師）

以下、名古屋大学大学院文学研究科の大学院生

中国哲学研究室

張名揚　（博士課程後期課程三年）
鬼頭孝佳　（博士課程後期課程一年）
近藤めぐみ　（博士課程前期課程二年）
李麗　（博士課程前期課程二年）
石丸羽菜　（博士課程前期課程一年）
服部寛風　（博士課程前期課程一年）
水野雅之　（博士課程前期課程一年）

日本文学研究室

森翔大　（博士課程前期課程一年）

中国文学研究室

大島絵莉香　（博士課程後期課程二年）